

【研究ノート】

## 展示「祝！ハワイにおける日本の“お祝い”の発展」にみる 歴史観点からの独自文化表現

A Unique Cultural Representation from Historical Perspective, as Seen in  
“Celebrate!: The Evolution of the Japanese ‘Celebration’ in Hawai’i”

秋山 かおり※

Kaori AKIYAMA

### 1. はじめに

企画展 “Celebrate!: The Evolution of Japanese Celebration in Hawai’i” 「祝！ハワイにおける日本の“お祝い”の発展」（邦題は筆者による）は2010年4月17日より6月18日までアメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市の日本文化センター（Japanese Cultural Center of Hawai’i; 通称 JCCH）で開催されていた<sup>(1)</sup>。この展示にはそのタイトルからも推測できるように、ハワイにおける日本文化発展の歴史を祝福しようという主催者側の明確な意図があるという印象を受け、またその意図は展示テキストと展示物からうかがい知ることができると筆者は考えた。なかでも祝い事別に分類されているコーナーのうちのひとつ「『地元の』事情（“Local” Context）」の展示テキストの一文がその意図を主張しているように思えた。

その主張を原文のままみにあげる：

Though some see the local practice of traditional Japanese celebrations as “wrong” versions of Japanese culture, they really represent the development of a culture unique to Hawai’i that incorporates the Japanese cultural practices of the Issei with the cultures of Hawaiians and various migrant groups to Hawai’i (Japanese Cultural Center of Hawai’i 2010a).

地元での伝統的な日本のお祝いの仕方を「間違っただ」型の日本文化とする見方もあるが、これらのお祝いはハワイでの日系一世の文化習慣がハワイの人々とハワイへ入植した様々な民族の文化と合体して発展した独特な文化を表しているのだ<sup>(2)</sup>。

---

※ 松本市立博物館

---

果たしてこの展示はJCCHの主張を裏付けているのだろうか。そしてこの展示に凝縮されているハワイにおける日本の文化は、日系人がハワイに暮らした120年あまりの変遷を提示しかつ表現することによって、独立したひとつの文化として定義できるのだろうか。そしてこのひとつの博物館によって定義された文化は“エボリューション＝発展”とその展示コンセプトのなかで呼べるのだろうか<sup>(3)</sup>。それには歴史的検証は必須だと思われる。以上の疑問を明確にするため、本稿ではこの展示内容の歴史的検証をすることによりこの展示の主張「ハワイの日本の文化は独自の文化であり“間違った”型ではない」の考察を試みたい。

それにはまず、日本人のハワイへの入植の発端とハワイ日本文化センター設立の経緯に触れ、この展示を紹介する。さらにこの多角的な展示のなかから3つのトピックを任意に選んで検証をする。それらはハワイ特有の発展をして日本国土での風習あるいは形態とは異なる要素を強くはらんだ、天皇誕生日、桜の女王祭り、ボン・ダンスとそれらの周辺事情とした。これらを相対する展示テキストを参照しながら、どのような発展を遂げた“お祝い”なのかその歴史的要素から検証し、この展示の主張「ハワイの日本文化は独自の発展である」を定義する。

なお、本稿において引用した展示テキストならびに英文はすべて拙訳による。またテキスト引用において特に筆者の協調したい部分は斜体とした。

## 2.1 日系人の歴史とJCCH

ハワイの日系人の歴史は「元年者（がんねんもの）」とよばれる横浜から人々の渡航にはじまる。明治元年の1868年に職人、元武士、犯罪者などの約150人からなる一団がハワイに来るが、畑仕事に不慣れで他の民族に命令されるなどの環境に馴染めなかった彼らは、後にその状況を聞いた日本政府に呼び戻されることになったが、うち約100人はハワイにとどまった（デニス・オガワ [Dennis M. Ogawa] p.5）。17年後の1885年にサトウキビ農園の労働力不足を考慮したハワイ政府と失業者対策に悩む日本政府が「官約移民」という形態で日本人移住者を斡旋した。のちに、斡旋元が民間会社に移り日本人入植者は「契約移民」と呼ばれたが、1900年にその制度は廃止され、また1908年に日米間の紳士協定により移住が制限され、さらに1924年の移住法により日本人の移住が禁止されるまでの間にハワイへ日本から渡航した人々は約22万人といわれる（矢口 2002 pp.25-27）。現在ハワイに暮らす日系人は主に以上の人々の子孫と思われる。

JCCHはこの日系人の入植と発展の歴史を次の世代に伝える機関として1987年3月に設立された。その設立案は1960年代からあったようだが、1986年の官約移民100年祭においてハワイ商工会議所（The Honolulu Japanese Chamber of Commerce）が発案したプロジェクト「ドリーム」が母体になっている。これは“日本からハワイへ来た開拓者達が次の世代をアメリカ社会の一員にすることを可能にした貢献と支払った犠牲”を歴史遺産として保存する団体を設立しようというものだった（Japanese Cultural Center of Hawaii 2010b<sup>(4)</sup>）。この経緯が語るように、JCCHは日系人関連の展示だけでなく、ワークショップやフォーラム、祭りなどの様々な地域へのイベントを主催し、日系人の歴史を現代に語り続けている。

## 2.2 企画展「祝い」



写真1 「冬の年中行事」ブライアン・サトウ撮影

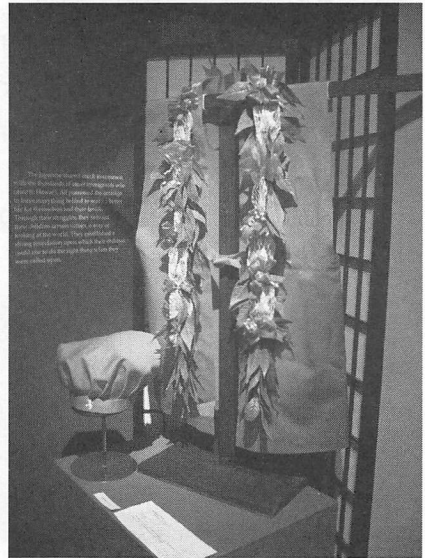


写真2 (右) 還暦の衣装 筆者撮影

では、この企画展もその歴史を語る一部なのだろうか。

JCCHの事業推進部長のブライアン・ニイヤ (Brian Niuya) によると、この企画展のアイデアは2007年にJCCH創立以来の寄付者であるアイランド・インシュランス・カンパニー (Island Insurance Company) からの補助金の申し出があったことが発端だったという。その内訳と目的は総額250,000ドル、毎年50,000ドルを5年間に渡り支給するというもので、その半分を展示制作に、残りの半分をリソース・センターへと使うことだったが、その条件として歴史展示の制作が強調されていた。そこで5人のアドバイザー委員会を召還し、展示トピックの可能性として、スポーツ、メディア、食文化などが検討されたうち、「祝い事 (Celebration) 」が年中行事に使われる物の収集などの容易さからシリーズ最初の展示テーマとして選ばれた<sup>(5)</sup>。

### 2.3 展示場を歩く

展示は大きく分けて4つのセクションから構成されている。まず展示入り口から左手に進むと視界に入る「歳時記と年中行事 (Calendar Section) 」は、正月をはじめとする冬からはじまり (写真1)、春の花見と子供の日、夏の盆踊り、秋の七五三などとそれぞれのコーナーがイメージカラーと共に設営されている。

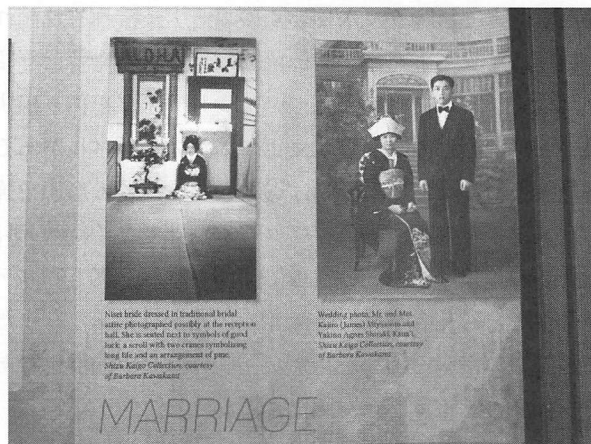


写真3 結婚式写真

バーバラ・カワカミ・コレクション 筆者撮影

春から夏のコーナーに移動する間に、「冠婚葬祭 (Life Cycle Section)」の生まれた時から卒業、還暦などの特別な誕生日までを提示するコーナーを通過するのだが、そこにはハワイの還暦で使用される赤いベストとレイが飾られており (写真2)、その横に過去のハワイ独特の様相、例えば、着物姿の花嫁にタキシードの花婿で撮影された結婚式の写真 (写真3)、あるいは大量の花輪に囲まれた葬式の古い写真なども見られる。展示中央のスペースには「地域の暮らし (Community Life)」として、地元の施設・寺・教会・学校などでのお祝いの古い写真が紹介さ



図1 (左) お花見 図2 (右) 誕生日 スアン・チェン(イラスト) デリック・イワタ (文)

れている。そして夏のコーナーの横には過去の「政治・歴史的な祝い事 (Political and Historical Celebration)」が展示され、秋の行事のコーナーを通過して入り口の裏側へと、まるで円を描いて戻るように、展示パネルを追って見ていくと一周することができる構成になっているが、どのコーナーから見てもストーリーの構成上問題のない作りになっている。

さらに、子供向けのハンズオンコーナーが花見のパネルと併に設営され (図1)、2つのビデオ (餅つきと盆踊り) が冬と夏のコーナーそれぞれ流れていた。

展示はイラストパネルで伝統的な年中行事や習慣を紹介し、テキストと主に古い写真が印刷されたスクリーンで事実に基づいたナレティブを作り出す役割を分担する。例えば、ハワイでの習慣としての厄年の説明と数え年のイラストパネルがある (図2)。たとえ印刷とはいえ、古い写真が多く使われている展示は過去の“お祝い”の形態を強いインパクトで語っていた。また写真やイラストなどの平面的なアプローチだけでなく、祝い事に関係あるものが所々に展示されていた。

展示の印象は、以上の白黒に印刷された写真とパステルカラーのイラストが過去と現在、大人と子供を含む社会全体を象徴しているようだった。またさほど大きくないギャラリーに様々なものが詰まっている印象を得たが、これは歴史的展示であったため、多くの写真や陳列物に深い歴史を代弁させる意図もあったと思われる。

---

前出の展示テキストにある“ハワイ独自の (unique to Hawaii)”と“間違っただけ型(‘wrong’ version)”はハワイの日系人文化への対極的な見方を示しているが、この対極を浮き彫りにするべく展示はすべてのコーナーに日本の伝統行事とハワイでの伝統行事との対比あるいは共生発展モデルを提示していた。

### 3. 展示の歴史的検証

ここではJCCHの主張を歴史的観点から検証するため、戦前で日系人社会から消えた“お祝い”としての「天皇誕生日」、戦後に興った“祭り”としての「桜祭り」と戦争を経ても現在まで継続している年中行事の「ボン・ダンス」の3つをこの展示のなかから選び歴史をたどる。

#### 3.1 歴史的・政治的な祝い事「天皇誕生日」

入植した日系人が天長節を祝った明治から昭和の祝いの形はどのようなものだったであろうか。「歴史的・政治的な祝い事」のコーナーから展示テキストの一節を引用する：

第二次世界大戦前には 日系人社会の大きな祝い事は、その当時の日本の政治が中心であった。明治天皇の誕生日（11月3日）は、日本人サトウキビ農園労働者によってあちこちで祝われ、またその祝日のための休日が要求され一通常は許可もされて一、お祝いの相撲トーナメントもあった。昭和天皇の誕生日（4月29日）は、1927年から戦争が勃発する1941年まで地域社会ごとに祝われ、1930年代には日本帝国主義の台頭とともにそのピークを迎えた。また日系人社会はアジアでの日本軍の勝利や日本の軍艦の寄港を祝ったが、第2次世界大戦はこれらのハワイの日系人社会での祝い事を事実上永久的に終わらせた（JCCH 2010a）。

##### 3.1.1 天皇誕生日と相撲

このハワイでの天皇誕生日の経緯をみるため、まず当時に生きた人々の回想録にたよる。ロナルド・タカキ（Ronald Takaki）はサトウキビ農場の日本人を従えその労働を管理していたC. ブリューワー会社（C. Brewer & Co. Ltd.）のマネージャーの回想を伝えている<sup>(6)</sup>：

1880年から11月3日になると日本人が休みをとった。私達は1週間仕事を延ばすようにしてやった。雇用主側が彼らの帝の誕生日祝いを延期することは不可能だったが、日本人はそのかわりに日曜日に仕事することには同意した<sup>(7)</sup>。そしてこの祝日は1910-1920年代のサトウキビ農園での日本人の主な祭りになっていった。

また当時者だったフクスケ・オオシロの回想がある：

天皇誕生日の祝いはあちこちで見られ、ほとんどそれは相撲だった。若く健康な男達が集まって日本式の相撲をしていた。沖縄人も一緒に仕事を休んでめしやに仕出し弁当をたのんだ。夜になると、彼らは三味線をだしてきたので、一緒に沖縄の踊りを踊った（Takaki 1983 p.112）。

このうちの相撲の伝統は1922年10月31日のマウイ島カフルイのマウイ神社で行われた天長節でも守られていたとの記録もある（ハワイ報知 11月1日号）。また1924年11月3日発行の日布時事にはその年の予定された相撲の番付も載っている。

その他の相撲の記録をみてもことにする。1936年10月10日に日本から八雲と岩手という軍艦が寄港する。ハワイの日系人は歓喜し、歓迎のイベントを3日間用意していたようだ。その歓迎



写真4 「歴史・政治的な祝い」ケース  
ブライアン・サトウ撮影

レセプションのなかに金比羅神社カパラマ（ホノルル市）で音楽やダンスとともに相撲が用意されていたが、それは軍艦乗組員対ハワイ日系人の交流相撲であった（ハワイ報知 10月8日号）。つまり相撲はハワイにおいて、1880年代から1930年代の日本人が入植してから最初の50年間において“お祝い”の呼び物であり、皆が一同に楽しめるものであったらしい。この展示のなかでこれらの記述を裏付けるものがあった。まるでハワイ出身の力士を表象したような展示をして当時の臨場感を出そうと、相撲の化粧回し、その化粧回しの持ち主、移民の入植記念事業の記念品などがならべられたケースであった（写真4）。化粧回しには持ち主だった力士のストーリーが添えられている：

マウイ島 ヒロセ・タツオ 廣瀬川という力士名で相撲をとった。1928年の昭和天皇の即位の時にヒロセも上位5位までに入賞するようになっていた。第二次世界大戦までは天皇誕生日に相撲トーナメントを行うのがハワイでは祝賀する方法だった。（JCCH 2010a）

この相撲を一人の力士にスポットを当てて、歴史的・政治的祝いのメインピースにしているディスプレイにはその相撲をスポーツでなく、“お祝い”の行事としてはじめたハワイ日系人の歴史を現代に語っている。

### 3.1.2 1935年の万歳

さらに展示テキストには「日本人の入植開始記念は大規模な祝い事になっていった」（JCCH 2010a）とあるが、移民50周年の1935年はハワイの日系人にとってどんな年であったのだろうか。この50周年式典を報じた地元新聞、スター・ブリテン（Star-Bulletin）は2月16日号の特集「50年のストーリー：1885-1935」のなかで、1910-1920年代に存在した日本人の投票がハワイ住民を左右しかねないという恐れと、若い日系人は良いアメリカ市民にはなれないという警告は否定され、日系人が平和的なハワイに同化したと見なしている。さらに日系人がこの50年で稼いだ収入

は巨額であったとして「どこの産業、仕事、造園業にもわが住民の日系人を見る」とその経済的繁栄を認めている (p.4)。

そのような経済的にも政治的にも安定の姿勢をみせはじめていた日系人はハワイ島で3ヶ所、マウイ島とカウアイ島で各一ヶ所、神社などで移民50周年記念を祝い、年長者などには杯が贈呈され、余興として劇や相撲、フェンシングなどが行われている。オアフ島ホノルルに至っては、日本領事館にて3,500人が集い、空前の大祝賀会となった。その集まりは「天皇万歳」と「在留民万歳」が叫ばれた集まりであつたらしい(日布時事2月10日;ハワイ報知2月10日)。これが展示でいう「大規模な集まり」であつた<sup>(8)</sup>。

以上、ハワイの日系人は入植後も本土の日本人と同じように日本の祝日をそれぞれの行事に合わせてハワイで祝っていた時期があつたが、太平洋戦争の勃発でそれらのナショナリズムを表現するかたちの祝いは消えた。そのひとつはサトウキビ畑で働いていた日系一世がはじめた天皇誕生日であり、日本が真珠湾攻撃をした1941年まで続いた<sup>(9)</sup>。1930年代には日本の軍艦寄港と移民50年祭なども祝われたが、その頃、ハワイの日系人は社会の一員として市民権を獲得しはじめた時期でもあつた。この約50年のうち、祝いのかたちとして相撲が奉じられることが多々あつた。この習慣は当時の日本人のナショナリズムを呈し、それゆえに現在は見られない。

### 3.2 春の年中行事「桜の女王コンテスト」

ここ50年の桜の女王コンテストは、桜祭り(Cherry Blossom Festival)の中心的イベントである<sup>(10)</sup>。これは戦後に興ったホノルルの祭りだが、ひな祭り子供の日とともに春の年中行事として展示の一部を成している。その展示テキストを引用する：

桜の開花は日本人が入植した場所のほとんどの気候に従順ではなかつたため、日系人の春の祭りは違った形を成した。1953年にホノルル青年商工会議所は初の桜祭りを開催する。これは様々な要素を盛り込んだ祭りではあつたが、開催以来から現在までの中心的存在は桜の女王コンテストである。第一回目は第二次世界大戦後の影のなかでの開催ではありながら、祭りは政治的に安全でかつ充分「アメリカ的な」日本文化を提供した。桜の女王は地域日系人社会の理想的な顔としての形跡を残した(JCCH 2010a)。

「桜祭り」が1953年に開催された時に、ホノルル青年商工会議所(Honolulu Junior Chamber of Commerce)はその要覧でこの祭りが目指す3つの目的を提示している：

- 1) 日本人と東洋文化の素晴らしい部分をハワイとアメリカ合衆国の人々にあらためて紹介する
- 2) 貿易の活発化と開始
- 3) ハワイへの観光客をもたらす新たな呼び物の設立<sup>(11)</sup>

この商業的な理由もふまえた呼び物としての「桜祭り」がたどつたその後50年の経緯を桜祭り

---

の要覧をたよりにみると、最初は盆栽の展示ならびに武道・日本舞踊などの地元民の日本文化の発表会としてはじまったカルチャー・ショーという部門に日本から宝塚や松竹レビュー、江利チエミなどを呼ぶ歌謡ショーが1960年代前半には加わり、アマチュアのタレント・コンテストを経て、1969年にはハワイ諸島在住のタレントなどで構成された「紅白歌合戦」(Kouhaku Utagassen)も登場し1980年代後半まで続く。このころ毎年桜の女王コンテストの優勝者はJALがスポンサーとして日本旅行を賞品として与え、女王はホノルルの日系人の代表である民間大使としての役割を担っていた。特記すべきは1975年の25周年記念の優勝者が皇室を公式訪問している。1980年代になり、桜祭りは増々大規模になりパレードなども行われ、設立当初の目的にかなったビジネス面での成功をおさめながら1990年代に入り、マラソンやゴルフトーナメントも組み込まれ、2000年にはブームになってきていた和太鼓祭りまでそのアトラクションにするなど常にショー・ビジネスとして変化を遂げてきた。

毎年考えられてきたこれらのイベントは、商工会議所の行ったマーケティングとしてのアトラクションであるのだが、別の大きな変化は桜の女王コンテストへの人種的な出場資格が長年の協議の後に変更されたことである。

ジョナサン・オカムラ (Jonathan Y. Okamura) は、1998年にホノルル青年商工会議所の理事達が桜の女王コンテストの出場者の資格が100%日系の血統を持つ者から50%に引き下げる決定をくだし、翌年2000年にその50%の日系人の血統を持つ女性が女王として選ばれた経緯を紹介している(2008)。このコンテストの規定の変化を多様なコミュニティでの社会的・文化的な現実に追いついたと評価しながら、一方、この出場ルール改革案が1984年にすでに理事会で議題に上っていたにもかかわらず16年間変更がなかったため、「日系人のような経済的にも政治的にも主流なグループは組織や活動において他を排斥する力を持つ」(p.250)とも指摘している。すなわち、同様の中華系やフィリピン系の美人コンテストが1999年以前に出場者の100%の血統を問う事をやめていたにもかかわらず、桜の女王コンテストは、日系人のための祭りであろうと長らくとどまった (Okamura 2008 pp.238-250)。

### 3.2.1 「政治的に正しい大和撫子」像

この桜の女王が祭りを通じて示してきた事はなにか。展示のコーナーで目を引くのは、ひな人形段飾りと並列されたアクリルケースの中にあるトロフィーとティアラを付けて微笑む若い女性の写真である(写真5)。またその隣にある一枚の大きな写真(シュウゾウ・ウエモト撮影)には着付けをする年配の女性と彼女が真っ直ぐに見据える花嫁衣装を着た対象が映っている。この配列は子供時代から結婚までの通過点に桜の女王コンテストが位置しているかのようだ<sup>(12)</sup>。

クリスティーン・ヤノ (Christine R. Yano) によるとこの美人コンテストで求められているものは、アメリカ本土の同様のコンテストとは違うスタンダードであり、ハワイの価値観に見合った“良い娘”である要素だという。つまり、外見上の美しさだけが優勝者の選考理由にはならず、「理想の隣の女の子」的な「やさしさ」が毎年の優勝者の栄冠を獲得してきた。それはこのコンテストが民族性価値観をもとに参加者自身をコミュニティーの主流に据え付けていく過程として機



能してきたからだという (Yano 2006 pp.4-5) <sup>(13)</sup>。よって日本文化で美德とされている価値観をもった「桜の女王」をコミュニティの代表として50年以上も選ぶ、いわば大和撫子コンテストを支えてきた桜祭りは、ひな祭り直後に行われるハワイ独特の祝祭であろう。

実際に「桜祭り」(Cherry Blossom Festival) という名称の祭りは、カナダや全米の都市で見られ、桜の開花(主にソメイヨシノ)に合わせその都市が主催するお花見の祭りもあれば、日系人文化の祭りという形で桜をシンボルとして使っている場合もあるが、この後者の祭りの中心はアートと文化アトラクションであり、美人コンテストではない<sup>(14)</sup>。おそらく桜のほとんど咲かないホノルルでは花見はできず、桜はひな祭りの桃の代用として女性の“お祝い”をイメージとして定着したと筆者は推測する。

一方、コミュニティを代表する象徴としての「政治的に正しい大和撫子」は、近年、他民族の祖先を持っていても認められるということである。これは「桜の女王コンテスト」がたどったひとつの道であり、ハワイにおけるユニークさ=エボリューションであることは否定できない。

### 3.3 夏の年中行事「ボン・ダンス」

日本では盆踊りも灯籠流しもお盆の行事であるが、ハワイでは様々な経緯でボン・ダンスは夏の間の約4ヶ月間の長期行事となり、夏の行事の展示の一部となって紹介されている。展示テキストを引用すると：

ハワイでは、お盆の祭りは皆が楽しむ多文化的な祭りに変容した。ハワイの多くの寺が週末の盆祭りを5月から9月までに調整して行う。よって熱心な人々は毎週違う場所のものに参加できる。ボン・ダンスは日系人の経験を具現化しており(最も有名な歌は名誉ある第二次世界大戦中の第442連隊へ捧げるもの)またアメリカやハワイの様々なポップカルチャーなどのエレクトリック・スライドからフラまでが催される。祭りでは食べ物やゲームなども催され伝統を伝えたい家族や友人に会いたい若者、人生を楽しむ老人を魅了する (JCCH 2010a)<sup>15</sup>。

では、その変容の経緯をみてみる。

#### 3.3.1 「4ヶ月間のお盆」

ハワイでは盆踊りがどんな特殊な状況で生まれ、ボン・ダンスになっていったのだろうか。中



写真5 「春の年中行事」一部  
ブライアン・サトウ撮影

原ゆかりによると、1885年の官約移民がサトウキビ農園で家と家の間に提灯を渡して踊りを楽しんだという記録があり、1910年代までには日系仏教寺院の庭や墓地・公園で踊られるようになったという。その後日系2世達の時代になると、「アマチュア音楽家の確保と踊り手の人数確保」（中原 2002; Onishi 1938）のために、同郷や同宗派の寺で日程をずらして行うかたちが定着した。太平洋戦争で一時中断したボン・ダンスは、終戦後の1946年には復活し、1949年の戦歿者慰霊祭では生演奏も行われた（pp.184-193）<sup>(16)</sup>。戦後に復興されて多くの人々が参加するようになったボン・ダンスはとりわけ1959年の立州祝いでも他の行事とともに行われ市民権を得る。「戦争を経験した日系人にとって、ボン・ダンスはアメリカ人として認められたという自身と誇りにみちたものとして演じられた」（中原 2002 p.196）。

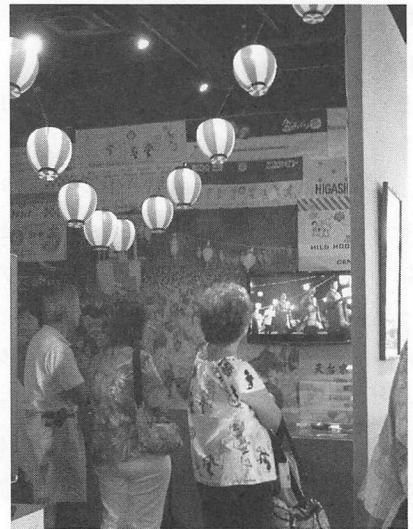


写真6 夏の年中行事と来館者  
筆者撮影

日系人として集団でのアイデンティティの確認にもボン・ダンスは貢献しただろうが、なんといっても限られた社交の場として存在してきた経緯もある。男女の出会いの場として、夜も更けて来ると踊りながら男の子がわざとぶつかり、それをうけて女の子が大げさによるけたりすることがあったらしい<sup>(17)</sup>。また中原も聞き取り調査から当時のボン・ダンスの場所はさほど明るくもなく男女の出会いの場所だったことを記述している（p.188）。

そのように人々に親しまれたボン・ダンスの展示は提灯が吊るされ、壁には様々な寺院で作った日本手拭が一斉に貼られ、真ん中にはモニターからボン・ダンスのビデオが流れて、にぎやかなコーナーになっていた。また壁にはいくつかのボン・ダンスの写真、特に戦争直後の数少ない提灯しか集められなかった状況の写真が目をついた。また別の写真は灯籠流しをハワイのお盆の行事として色鮮やかな灯籠と共に紹介していた（写真6）<sup>(18)</sup>。さらにこの展示ではマウイ島で収録されたビデオクリップがアップテンポの「福島音頭」の音楽を伴って流れ、人々が踊るさまを見せながら、太鼓メンバーのインタビューとオーバーラップしてリズムカルな雰囲気を出していた<sup>(19)</sup>。

### 3.3.2 ボン・ダンスと灯籠流し

多くの人々にとって、ボン・ダンスと灯籠流しは共に発展してきた行事であった。そこで、その変遷にふれる。

ハワイの灯籠流しは、もちろん一世入植者が持ち込んだものと思われるが、本来の盆の行事としてボン・ダンスと合わせて存続しているものは現在オアフ島ではハレイワ浄土院とマウイ島のラハイナ浄土院だけである。またハレイワ浄土院住職江崎晃司氏によると、1955年に第一回の灯籠流しがハワイでの最初の灯籠流しだという<sup>(20)</sup>。この寺院は海のすぐ脇にあり中庭から歩いて海

岸へでられるため、毎年のボン・ダンスのあと灯籠が海に流される。

江崎氏によると、おそらく開催当初は人集めの地域のイベントとして100人から200人前後が集まった行事が、隣接の海岸から西の方へ灯籠が流れるので、西方浄土に亡くなった人の魂が行く、あるいは日本に帰れるとして次第に多くの人々が参加するようになったという。毎年灯籠が滞りなく流れるように、潮の満ち引きが一番大きい7月の吉日を選ぶとのことであった。1980年頃は約3000人が集まるほどの大きなにぎわいになり、「住宅街にある小さな寺が様々な人々の多目的な趣向を反映する島での活動の場と化し、もはや盆の行事だとは思えない」とデニス・オガワは記述している(1978 p.536)。

マウイ島でも灯籠流しによって故郷へ死者の魂が帰るとする信仰は、前出のビデオクリップに登場するケイ・フクモト(Kay Fukumoto)からも聞くことができる(オプティカス・コーポレーション[Opticus Corporation] 2010)<sup>(21)</sup>。マウイ島でボン・ダンスの後にも海に灯籠を流す儀式が“Toro Nagashi”という日本語の名前で親しまれている様子も映し出されている。

これらの灯籠とともに日本に魂が帰るとする信仰はハワイに生まれた独特の形態ではないだろうか。ただ残念なことに展示テキストでは灯籠流しは伝統的な習慣の一部としてしか述べられておらず、「祖先の魂を灯籠が他の世界へと運び去る」(JCCH 2010a)と暗に説明されている。展示においてこの行事は、独特な文化に発展したボン・ダンスの補足的な存在にとどまっていた<sup>(22)</sup>。

ハワイにおいてボン・ダンスは4ヶ月に渡って続けられ、ひときは大きな存在感のある行事である。それは100年以上経って現在のかたちをつくった。もはやこれは日本の盆から派生したハワイ独自の文化であろう。

## 4. 考察

### 4.1 歴史的考察

これまで歴史的視点からこれらの“お祝い”の経緯と周辺事情をみてきたが、日系一世がハワイに入植してから太平洋戦争勃発まで続いた天皇誕生日などの“お祝い”と戦後に生まれた桜祭りはその終焉と発生に共通の理由を持ち、またボン・ダンスは独自の発展を遂げたといえるのではないだろうか。

天皇誕生日は現在も日本では祝賀されている国民の休日であるが、突然の1941年12月7日の日本帝国軍による真珠湾攻撃にさらされたハワイの日系人は2つの国の狭間に置かれ、天皇誕生日などは「ひな祭りや盆踊りや灯ろう流しなどの年中行事も取り止めになった」(矢口 2002 p.91)くらいであったため、もはや祝うことは叶わなかったのはいうまでもない。つまり、先述の展示における「第二次世界大戦はこれらのハワイの日系人社会での祝い事を事実上永久的に終わらせた」という記述は当時の日系人が日本的な“お祝い”を全て中止した史実を語る。

例えばレイラニ・ニシメ(Leilani Nishime)は、ジャパニーズ・アメリカン・ナショナル・ミュージアム(Japanese American National Museum)で制作した太平洋戦争中の日系人についての企画展“Fighting for Tomorrow: Japanese Americans in America's Wars”のケース・スタディにおいて女性

が展示コンテンツに全く含まれていなかった事例をとりあげ、それは戦争により日系人の男性のアイデンティティが変革したと同時に女性のアイデンティティも固定化されてしまった結果と指摘している(2004 p.47)。ハワイからも、アメリカ軍に志願した日系人兵士は約1万人あり、アメリカ市民として意思表示をすることにより、日系女性はそれを支える側に立つという固定した立場を示す必然があっただろう<sup>(23)</sup>。戦後8年経って、桜の女王コンテストが



写真7 フライング・ソーサー型 筆者撮影

企画され長年にわたり続いた背景には、戦後の日系人のイメージの回復があったのではないだろうか。それが、展示テキストの語る「政治的に安全でかつ充分『アメリカ的な』日本文化」の提示であろう。ここにおいて、太平洋戦争で終わった“お祝い”と戦後に興った“お祭り”は一見なんの繋がりも見出せないようであり、日系人のアイデンティティの変換の歴史という点で関係性がある。

一方、ボン・ダンスは一度中止になったもののイデオロギーはさほど関係なかったといえよう。むしろハワイの受容的な文化がその他大勢を取り込んで来た。そしてボン・ダンスにまつわる食文化と、ハッピー着物や下駄などのコスチュームがそのほかの民族グループを魅了してきたともいえるのではないか。事実、ボン・ダンスの展示コーナーではマウイ島でしか売られなかった当時人気の「フライング・ソーサー」という菓子を作る道具を展示していた(写真7)。

ロバート・ラベンダ(Robert Lavenda)によるとアメリカの地方の祭りは、コミュニティの一員という参加資格があれば、開催時の食べ物も提供される便利な場所で、友人や家族との楽しみがひろがり親交を深める機会になるとのことだが、一方で祭りの案内対象がはっきりしすぎるとその他大勢が参加を拒まれてしまうため、主催者が「私達」と「彼ら」などの対象を同じコミュニティの中では断言しないことが多いと指摘する(1992 p.81-85)。

ボン・ダンスと灯籠流しに大勢が参加できる理由もここにある。この4ヶ月間の年中行事では日本人の血縁を問われなければ、寺院にいくにしても仏教徒である必要もない。よって、「ハワイでは、お盆の祭りは皆が楽しむ多文化的な祭りに変容した」との展示表現は歴史的に見ても妥当であろう。ところがもう一方の「ボン・ダンスは日系人の経験を具現化しており」を検証するには、その歴史だけでなく、無形の文化として毎年盛んに変化する曲や踊りを丁寧に調べる民俗学的な調査が必要である。ただ少なくとも、これまで述べたように、サトウキビ農園から寺院まで場所を移しながら、今もハワイの人々を魅了して止まないその現象面だけでも今日の生きる歴

史ととらえることは可能であろう。

## 4.2 JCCH への考察

次に前出の JCCH の主張とそのミッション・ステートメントの共通性をみながら、博物館側の展示の意図を考察する。それは、この博物館の持つ目的が日系人社会への貢献を含んでいるため、常に日系人の入植時代から戦中の歴史、または日系文化の保存や日本系アート（日本での芸術活動をしているアーティストも含む）に関連した活動を断続的に繰り返しているからだ。例えば、この企画展の



写真8 ボン・ダンスのレッスン 筆者撮影

展示中も2ヶ月の間に以下のような3つのフォーラムが開催された：

- a. 「桜祭りの現在と未来」 パネル・ディスカッション ゲスト：クリスティーン・ヤノ 4月24日
- b. 「カウ・カウ (Kau Kau)」 ハワイの食べ物と文化 食べ物と祝い事についてのレクチャー：アーノルド・ヒムラ 5月8日
- c. 「世代を超えたボン・ダンス」 地域のボン・ダンス関係者を囲んでのディスカッションとボン・ダンスのレッスン 5月22日 (JCCH2010a 展示パンフレットより)

筆者はこのうちの5月22日のボン・ダンス関係者のディスカッションに参加し、100人近くが同席しているのを確認した。フォーラムは和やかな雰囲気の中かでどうやって次の世代にボン・ダンスを伝えていくかという懸念が真剣に語られ、年配の方々は若き日の特定の寺院での名物の食べ物の話で盛り上がり、最後に人々は輪をつくり踊った（写真8）。博物館が年中行事の存続に場所を提供している例だといえる。

では果たして、JCCHの展示づくりの対象は、このような地元の人々なのであろうか。ジェームス・クリフォード (James Clifford) はカナダ北岸の原住民の博物館を訪ねた際の感想を以下のように綴る：

地元ベースの、部族的や少数派の博物館とアーティスト達は国内や世界的に広く認識されることを切望するかもしれない。それゆえ支配的な文化背景、市場、成功の法則などを行ったり来たりしながら (中略) たえず続く戦略的な活動が求められる (1997 p.122)。

では、この展示はハワイの日系人の文化は「間違った」型の日本文化ではない」と主張することが戦略なのだろうか。そのような価値観を持つあるいは持ってきた対象は誰であろうか。また展示タイトル中の“Celebrate (祝) !”は、自分たちの地域社会に対しての“お祝い”なのか、あるいは彼らの文化を認め祝うべきだと我々日本人も含めた世界へ向けてのJCCH側の主張だろうか。

## 5. まとめ

以上のように歴史的に検証した結果、ハワイにおける過去の「天皇誕生日」、現在も続く「桜祭り」と「ボン・ダンス」は周辺事情も含めハワイにしかみられなかった、あるいは見られない形態の日系人を中心とした祭りであり、“お祝い”として自立した文化であることをJCCHは企画展「祝！ハワイにおける日本の“お祝い”の発展」を通じて来館者に提示していることを確認した。またその祝い事の歴史的な必然性による衰退—特に太平洋戦争—も展示からわかり、ハワイの日系人文化は多様性を持つ文化へと常に変化し、今も地域に根付いていると考察できる展示であった。

ハワイでの日系人の祝い事の発展の歴史は、この展示が映し出すように、その担い手が日本人としての別支所にいるような感覚から離脱してアメリカでの「日系人」になっていった側面もあり、それゆえ日本の風習を懐かしみつつも手放し、別の創造物を作ってきた過程でもあった。その手放したもののなかには、「天皇誕生日」などのナショナリズムの放棄もあったが、日本の風習に準じようという母国への郷愁もあっただろう。また、入植した当時はサトウキビ農園の耕地で休日を返上してあるいは眠らずに夜間に祝うことしか許されなかった彼らが、その子孫へ“お祝い”を託し、ハワイの他の民族グループや観光客を取り込むまでの「桜祭り」などの大きな祝祭を開催し、また絶え間なく他者を魅了する「ボン・ダンス」などの祭りの発信源にまでなった歴史である。よってこの展示の提示するハワイの日系人文化は、多様性と歴史をもつ独立した文化であり、“間違っただけ”型という比較は成り立たない。

最後に、冒頭で疑問視したJCCHがこの展示において日本的あるいは日系的な文化を定義した意図はこの考察では明確にできないが、展示テキストの結びを引用してその姿勢を推測する：

なぜそしてどうやって私達はその文化の意味を明らかにし、文化の発展を祝い続けるのだろうか。だれもこの文化がどのような方向に行くのか、またどんな時代が来るのかはわからない、しかし私達がこれからも“お祝い”を続けることは確かであろう (JCCH 2010a)。

この声明文ともいえる展示テキストの結びから、この展示は博物館がコミュニティの代表としてその祝い事の継続の歴史を認めることにより、ひとつの民族がたどり着いた文化のかたちの集大成を見せたのであり、これからも地域社会とともに独自文化を担うことを宣言した場であったと、筆者はこの企画展「祝！ハワイにおける日本の“お祝い”の発展」を考える。

---

[謝辞] この調査の一部はアイランド・インシュランス・ファウンデーションからの補助金により調査員としてJCCHに籍をおいた時期に行われた。調査に協力していただいたハワイ州オアフ島の仏教系寺院や図書館・博物館関連施設、ならびに常に暖かいご示唆をいただいたブライアン・ニイヤをはじめとするJCCHのスタッフに感謝の意を表明したい。

## 註

- 1 Japanese Cultural Center of Hawai'i は和名として「ハワイ日本文化センター」を使用している。以下、本稿ではJCCHを使う。
- 2 一世を表す言葉 Issei は Nisei, Sansei, Yonsei と同様に英語表記の一部になっている。和文は拙訳。
- 3 “evolution”は便宜上“発展”と訳したが、“進化”という意味もあり、ひとつのモノが新たなモノになる意味を含む要素をここに表す。
- 4 JCCHのミッション・ステートメントには「活力のある情報源となるため、進化する日系アメリカ人としてハワイで経験を積む現在と未来の世代を教育することにより我々の多様な地域社会を強化する」とある。
- 5 Island Insurance Company, Ltd. はホノルルの保険会社であり、JCCHのみならず学校などにも補助金 (Island Insurance Foundation) を与えている。ブライアン・ニイヤ氏へのインタビューによる (2010年6月30日)。
- 6 植民地下ハワイで1910年代には巨大化していたサトウキビ農園協会の主な会社のひとつ(デニス・オガワ 1978 p.134)。
- 7 原文には“Mikado's Birthday”とある。
- 8 アメリカ合衆国政府が1924年に排日移民法を制定してハワイの日本人は永住することを決意せざるをえなかった。よって「在留民」という言葉が妥当なのであただろう。またこの展示では1968年から1985年の移民100年祭と2000年に行われた沖縄移民100年祭も提示していることをお断りしておく。
- 9 天皇誕生日においては1940年まで例外年をのぞきほぼ毎年ホノルル日本領事館で祝賀会が催された。古い記事では1900年11月6日発刊の「やまと新聞」でその内容が報じられているが、「日布時事」1940年4月30日発刊の天皇誕生日の記事が最後になっている。
- 10 The Cherry Blossom Festival (通称CBF)は1989年のホノルル商工会議所作成の要覧(Directory)で日本語タイトルとして「桜祭り」と表記され、このころから日本語表記のポスターも登場し、明らかに日本人観光客も意識した祭りづくりを感じる。よってこの稿では設立団体による和名を用いる。
- 11 同上要覧1954年版参照。
- 12 写真5のティアラはスポンサーであるJALから1972年に寄贈され実際に使用されたもの。

---

文化人類学者クリスティーン・ヤノ(Christine R. Yano)はこの美人コンテストの参加者 50 人以上にインタビューを行うなどのフィールドワークを通じて、この桜の女王コンテストが持つハワイの日系人社会における意味をその著書で明らかにしようとした。

13 「良い娘」は原文では“Nice Girl.” 桜の女王コンテストは中流階級の女性観と以下の文化的価値観(他人を優先し、年配を尊敬し、コミュニティの代表として彼女自身を上手に表現し、とくに人前で話す時の大切さを知っている)を重要視しているとヤノは指摘する。

14 以下のウェブサイトを参照した(国・州名は割愛する)。

バンクーバー市 <http://www.vcbf.ca/>

ワシントン D.C.市 <http://www.nationalcherryblossomfestival.org/cms/index.php?id=414>

デンバー市 <http://www.tsdbt.org/cherryblossom/>

ロス・アンジェルス市 <http://www.cherryblossomfestivalsocal.org/index.htm>(いずれも 2010 年6月 30 日検索)

15 ここではハワイの盆踊りを日本での盆踊りと区別するために「ボン・ダンス」と記載する。またエレクトリック・スライドとはラインダンスの一種。

16 第 442 連隊(442<sup>nd</sup> Regimental Combat Team)は第二次世界大戦中にアメリカ西海岸出身とハワイ出身の日系2世の兵士を中心に編成されたアメリカ軍の部隊でヨーロッパの過酷な前線に送られ、負傷者・戦死者を多数出した。

1951 年に「岩国音頭」にのせてハワイの尾崎無音が 442 連隊を讃える歌を作詞し、当時山口県岩国市在中の豊岡安子の歌を伴い日本でレコード化されてハワイに 500 枚ほど送付された(中原 p.194)。

17 曹洞宗ハワイ国際布教総督部の駒形宗彦(しゅうげん)総監によると、現在 100 歳くらいの女性が盆踊りのときだけ両親の許可なしに遅くまで出掛けられた記憶を持つ。また 1 世 2 世からの寄稿による曹洞宗ハワイ事務所編“Gokurosama”(2005)にはこのようなボン・ダンスへの楽しい思い出が多く寄せられている。2009 年 5 月 2 日インタビュー。

18 写真6: 右の女性のブラウスは盆踊りの手拭を縫い合わせたもの。

19 福島音頭はハワイでは歌も伴ったライブ演奏でボン・ダンスに用いられる活気のある音頭である。筆者が知る限り、踊りは単純な動作の繰り返しで覚えやすく音楽は段々とテンポが早くなるので若者に人気がある。櫓の最前列はかなりの熱気につつまれ集団ラインダンスを彷彿する。福島音頭のハワイで人気を呼んだ経緯は中原ゆかり氏の研究に詳細がある。福島音頭に限らず、沖縄のエイサーがライブで演奏されることもある。これらの移民が持ち込んだ地域色の豊かさと共生がハワイの盆踊りをボン・ダンスにせしめた要因だと考える。

20 2009 年6月 12 日インタビュー。

21 原文“back to home”は死後の世界に還るといよりも故郷に帰るといふ日本を思わせるニュアンスを強く感じる。

22 展示では紹介していないが、日系人以外の参加者が集った灯籠流しも存在した。ハワイ天台宗別院住職荒了寛氏によると、この寺では 1987 年から灯籠流しをお盆の行事としてホノルル市アラワイ運



---

河で行っていたが、2002年の運河の工事をきっかけに中止せざるをえなかった。天台宗の方では戦死した日本兵の魂を弔うものとして始めた行事だが、太平洋戦争で子供を失ったアメリカ人などが参加するようになり、「怨親平等」(仏教用語で敵味方もなく)をスローガンに行うようになっていった。アラワイは運河のためカヌーで灯籠を海まで引いて流すというものであった(2009年2月24日インタビュー)。

23 デニス・オガワによると9,507人となっている(p.322)。

付記として本稿では日系人と第二次世界大戦または太平洋戦争について言及してないが、このような日系人の歴史展示を考える際にはその背景を理解するために、彼らの視点からの太平洋戦争が日本でも広く認識されるべきだと考える。

### 参考文献

- Clifford, J. 1997 'Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century' Harvard University Press, Cambridge.
- Japanese Cultural Center of Hawai'i [日本文化センター] 2010a 'Celebrate! : The Evolution of Japanese Celebration in Hawai'i' (Script by Brian Niya)
- Japanese Cultural Center of Hawai'i [日本文化センター] 2010b <http://joch.com/> (2010年7月検索).
- Honolulu Junior Chamber of Commerce [ホノルル青年商工会議所] Cherry Blossom Festival Directory 1954-2001.
- Honolulu Star Bulletin 1935 February 16, 'Story of 50 years'
- Lavenda, H.R. 1992 "Festivals and the Creation of Public Culture: Whose Voice(s)?" in 'Museums and Communities: The Politics of Public Culture' (Eds.) Karp, I, Kreamer, C.M, & S.D. Lavine, Smithsonian Institution Press, Washington, D.C. pp. 76-104.
- 中原ゆかり 2002 「ハワイ日系人のボン・ダンスの変遷」『民族音楽学の課題と方法 音楽研究の未来をさぐる』(水野信男編)世界思想社 pp. 181-203.
- 日布時事新聞 1924年10月3日号, 10月24日号, 1935年2月10日号, 1927-30年, 1934-38年, 1940年のうち4月29日・30日号.
- 布哇報知新聞 1922年11月3日号, 1936年2月8日-19日号.
- Ogawa, M. D. 1978 'Kodomo no Tame ni--For the Sake of the Children: The Japanese American Experience in Hawaii' University of Hawaii Press, Honolulu.
- Okamura, Y. J. 2008 "Ethnic Boundary Construction in the Japanese American Community in Hawaii" in 'Asian Settler Colonialism: From Local Governance to the Habits of Everyday Life in Hawai'i' (Eds.) Fujikane, C. and Okamura, J.Y. University of Hawaii Press, Honolulu. pp.233-255.
- Opticus Corporation Media Production (2010) Japanese Cultural Center of Hawai'i "Bon" (Audio Film).

---

Ronald, T. 1983 'Pau Hana: Plantation Life and Labor in Hawaii, 1835-1920' University of Hawaii Press, Honolulu.

矢口裕人 2002「ハワイの歴史と文化 悲劇と誇りのモザイクの中で」中央公論新社.

Yano, R. C. 2006 'Crowning the nice girl: gender, ethnicity, and culture in Hawaii's Cherry Blossom Festival,' University of Hawaii Book Press, Honolulu.

やまと新聞 1900年11月2日号, 11月6日号, 1905年12月2日号.